

第1章 経験哲学

今日のグローバルな問題のなかで、生態系の持続可能性はとくに差し迫ったものであり、幅広い背景をもった研究者たちがこの問題をなんとか理解しようと努めている。本書も、この探求の一助になることを目指している。実践的な解決策は示せないが、環境破壊という差し迫った現実に対する理論的な提案として、社会科学と人文学の理論的ツールをどのように変容させるのかを検討する。私の貢献は、経験哲学 (empirical philosophy) の実演という形をとる。ひらめきの源泉として食べることに関する民族誌的なストーリーを用いることにより、既存の哲学のレパートリーを豊かにしようと試みる。これは喫緊の課題である。アカデミアのなかで現在使われている理論的な言葉は、過去の問題を取り扱うために準備されたものだ。過去の問題が消え去ったわけではないが、それらの問題に対処するために作られた言葉は、いま問題になっている、地球上の生命に対する人間の干渉にはうまくない。過去の問題には、考えたり話すことを上に置き、食べたり育むことを下に位置づけ

る、「人間」^{ザヒューマン}についての階層的な理解が染みついている。この階層化に干渉したら何が起きるだろうか。身体を維持する食べ物を、実際的な目的に資するだけでなく理論的にも意義深いものとして尊重したらどうなるだろうか。

この文脈では、**理論**という用語は、さまざまな事実を分析的にまとめる作業から導かれる包括的な説明図式を表すわけではない。そうではなく、現実が知覚され操作される方法を形作ることに寄与する言葉、モデル、比喩、構文を意味する。ある思想が現れ言語化されることを可能にする一方で、他の思想を背景に押しやりたり排除しうるような知的な道具立てのことである。「理論」が思考を開いたり閉じたりするのであれば、今日のアカデミアに普及している理論的レパートリーが何を言語化することに寄与し、何に沈黙を強いているのかという疑問が生じる。私が関心をもっているのはこの間である。現在の社会科学と人文学が依拠している理論的レパートリーは、封建領主からの解放や、人間を疎外から守ることや、平和な政治体制を構想することといった、人間主義的な理想を結節点としてつなぎ合わされてきた。前世紀を通じて、研究者たちは、人間の尊厳のために発言し、産業プロセスが人間を資源として利用することに反論してきた。実験室において人間の被験者を物言わぬ客体のように扱うべきではないと主張し、数百万人が殺された戦争への応答として合理性と適正手続を擁護してきた。人間としてふさわしい敬意が十分に払われていない人びとがかつて多くいたし、今もいるということ、繰り返し主張してきた。しかし、人権が少なくとも理論上は全人類に与えられたことによつて、人間は、やはり理論上は、世界の他の部分から引き剥がされることになった。「人間には考え話す能力がある」という考え方が人間を差別化した。これが**人間例外主義**であり、「人間」は

何かしら特別な価値のある生き物だという信念である。

過去数十年のあいだ、人間例外主義はさまざまな角度から批判されてきた。批判者たちは、「人間」を強制、疎外、暴力といった暴虐から守ろうとすることには理解を示している。疑問を呈しているのは、私たちの共感を人間に限定することに対してだ。他の生き物たちも同じように尊重に値するし、地上の無生物も同じく尊重されるべきである、というわけだ。最近のマルチスピース研究は、象、犬、トマト、ミミズ、蛙、ゴムツル、小麦やそのほか多くの生命体に関心を向けてきたし、人間以上の存在についての研究は、岩や川や水や油やリンや塩といった多様な物に手をのばしてきた⁽¹⁾。研究者たちは、これらの現象を自らの言葉で問い直そうとしている。しかし、そこでの言葉とはなんだろうか。羊や微生物や分子のエージェンシーについて語ることはできるだろう。あるいは、ダニやツルや岩の独特の主体性を称揚することもできるだろう。しかし私はここに引かかっている。「エージェンシー」や「主体性」といった言葉は、「人間」についてのある特定の理解、すなわち二十世紀の人間学 (philosophical anthropology) が (先人たちの議論にもとづいて) 形作ったまさに人間中心主義的なヴァージョンに徹頭徹尾つまぬかれている。この見立てが、本書の出发点にある。つまり、私たちの理論的な道具立てに刻み込まれた「人間」は普遍的な人間ではなく、極めて特殊な種類の、人間の一つのあり方ではないということだ。この種の人間は、ちょうど世界との身体的な関わりの上に「彼」の思考が位置づけられるのと同じように、他の生き物の上にそびえ立っている。したがって、「エージェンシーや主体性などの」彼の特徴を人間以外の世界にも広めていくことで、「人間」から例外主義を奪いとるだけでは不十分である。そのような特徴もまた、改めて検討しなおすに値す

る。人間であるとは、どのようなことなのだろうか。

人間主義的な哲学の伝統における知的な道具立ては、今日の「国際的な」社会科学と人文科学に広く浸透している。本書では、おもに英語で行われた研究を参照する。隣接している言語に埋め込まれている理論は根本的に異なると言いたいわけではない。私が記述していくことになる人間学の形成に、ドイツ語とフランス語は決定的な役割を果たしてきた。オランダで育ち教育を受けたので、オランダ語の文献も用いていく。しかし、これらの隣接言語間の共通性と摩擦については、本書の射程を超えている。⁽³⁾ 全般的に、本書の問いの正確な地理的範囲については精査していない。私は、英語で出版された近年の学術研究の背後で温存され続けている「人間」の階層化の痕跡に干渉することに集中した。この階層化にはヴァリエーションがある。ときに「人間」は、卑しい死すべき身体と高貴な考える精神という二つの物質に分けられ、上下に重なりあっている。物質ではなく活動が区別されることもある。この場合、食事や呼吸といった代謝の過程が基礎的なものとされ、動くことはやや高次であるとされる。知覚はさらに上にあり、考えることはもつとも際立った高次の活動とされる。複数の感覚を比較して評価を下す研究もある。そこでは、嗅覚と味覚は信用されず、触覚は疑われるが、視覚と聴覚は外界の情報を提供するものとして称賛される。本書ではこのランク付けについて詳細に検討していくが、この短い要約がすでに示しているように、（身体物質に付随し、代謝活動であり、信頼できない感覚を使う）食べることは、つねに見下されてきた。このことが、私の探求を特徴づけている。私たちが「人間」による世界についての認知的な省察を称賛することをやめ、その代わりに人間によ

る世界との代謝的な関わりあいから手がかりを得ようとするならどうなるだろうか。あるいは別の言い方をするならば、考えることではなく食べることから、私たちの理論的レパートリーについてのひらめきを得るとしたらどうなるだろうか。

この問いに取り組むために、昨今の知的レパートリーがどのように「人間」に関する階層的な理解によって特徴づけられているのかを分析していく。比較のための足場として、食べることに関するさまざまな模範状況を幾度も紹介することで、理論的なひらめきの源泉には多くのオルタナティブがあることを示す。これらの介入は、一連の一般的な用語のもとに集められている。二章は^{ペーシング}あることについて。この抽象的な言葉を吟味し、個別具体的なもので満たすことで、周囲に広がる環境の中に位置づけられる三次元の身体を持った^{ペーシング}存在としての人間が現れる。これらの存在にとって重要なアイコンは歩く人だ。しかし、歩く人が環境のなかで（一方の足をもう一方の足の前に出して）身体を動かすのに対し、食べる人は身体のなかで（齧ったり噛んだり飲み込んだりして）環境を動かす。このことが、まったく異なる**存在**を生み出す。三章は、**知る**ことについて。通常、知ることは、主体による客体への関わりから得られるものであり、主体は離れたところから知る対象を知覚するとされる。しかし、知ることが離れた場所から編み上げられるとしても、食べる際には、知られる客体は知る主体に組み入れられる。これによって、客体と主体の両方の変容が生じる。四章で取り上げる**すること**についての確立された理解は、エージェンシーをモデルとしてきた。そこでは、自由意志による手足の運動のような意図的な行為が示唆されている。食べる際に、通常、手は食べ物を口に運ぶ。飲み込むことも筋肉による活動だ。だが、それに続く消化することは同じようには練習できないし、中心から制

御されるものでもない。それは、広がり、かき回すたぐいの**することである**。五章では、**関わること**に取り組む。二十世紀の研究者たちは、人は互いにどのようにに関わり、関わるべきなのかについて検討してきた。与えることは奪うことよりも良いのだと強調し、^{キンシップ}親族関係や^{コンパニオンシップ}交友関係について主張してきた。この主張は、関わりあうものが対等であることを前提としてきた。しかし、食べることは非対称的な関係である。このことが、平等をどう達成するかという問いから、異なるものの消去をいかに避けるのかへと変化させる。最後に六章では、社会―物質的な政治に関心を向け、再び理論に戻ってくる。本書での学びを首尾一貫した全体に溶かし込むのではなく、それぞれをそのまま際立たせることにした。色とりどりのパッチワークや、多声的な歌や、いかなればビュツフェのように。

本書は難しい。理論的な道具立てと経験的な布置のあいだを、通常とは異なるやり方で行き来していることも理由の一つだ。ここで語られる経験的なストーリーは、食べることでそれ自体に関する理論的な結論を導くものではない。そうではなく、**ある、知る、する、関わる**に関する私たちの理解を呼び覚ますことを目指している。十年近くにわたり、私は、関連する文献を読み、食べる状況を民族誌的に調査して

言葉と革命

一九七一年、オランダの公共放送は**人間の本性**についての哲学的議論を放送した。二人の主役が、それぞれの言語で話をした。ノーム・チョムスキーはアメリカ英語を話し、ミシェル・フーコーは一文一文が長いフランス語を話した。オランダ人の司会者は、大部分は英語を話していたが、折を見てフランス語に切り替えていた。オランダ語による字幕がつけられ、どこどこで背景説明が挿入された。背景説明を行ったのは、よく知られた知識人で、フローニンゲン大学の哲学